

第 10 回市史講座ミニレポート：平成 28 年 1 月 9 日（土）

地図から読み解く近世の松江市域

講師：上杉和央先生（京都府立大学文学部准教授）



上杉先生は平成 25 年度刊行の『松江市史史料編 11 絵図・地図』編纂に携わって頂きました。松江市域に関わるものとしては国絵図、城下町絵図、村絵図など、様々な目的や視点から描かれた地図が多数のこされています。今回の講座では、文字情報ではないこのような地図から何が読み取れるのか、ということをお話しして頂きました。

地図を使った研究は大きく分けて、（1）伊能忠敬の地図製作に代表されるような、作製自体をめぐる歴史の分析（2）描かれた内容から生活や生業を復元する（3）社会・文化史を読み解く（例えば町人などの社会的組織）があり、とくに近年「文化的景観」というカテゴリーが誕生したことにより、地図が地域らしさの一端を理解する素材として利用されているとのことです。さらに具体的な絵図の種類を揚げて説明して頂きました。

（1）国絵図…主なものとして慶長国絵図にはじまる 4 度の国絵図作成について紹介されました。時代が下るに従い、具体的な内容のものから形式的なものへと変化しました。これら国絵図は大変大きなもので、狩野派の絵師が描いた大変美しい色彩のものです。

（2）村絵図…「上講武村山絵図」（図 1）や「島根郡七瀬浦絵図」などを取り上げられました。これらの絵図には田畑の広がり・山（木の有無）、竹山、集落、橋、「輪」で区切られる田などが描かれ、その地域の人々の生活が見えてきます。こうした表現は当時の人々がいつも見ている当たり前の景色が無意識に描かれており、あながち適当なものとは言えず、的確に表現されているのでは、と考えられています。

地図の主題（作者が意図的に書き込んだ訴えたい内容）とともに、主題の外側（作者が添えたもの）からもその地域の「地域らしさ」を垣間見る事ができる、とお話しされました。